

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<新刊紹介>

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	37
ページ	87-92
発行年	1985-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10293

△新刊紹介▽

北島正元著『近世の民衆と都市』

―幕藩制国家の構造―

本書は、昭和五三（一九七八）年四月から五七年四月までの四年間、法政大学文学部史学科で日本近世史および近世史研究を講義をされた北島正元先生の論文集である。

北島先生は、去る昭和五八年一月一日、享年七一才で逝去されたが、昭和一〇年三月、東京帝国大学国史学科を、卒業論文「江戸幕府直領の政治的成立」をもって卒業された。その後、大学院を修了された先生は、愛知県史編纂員を振り出しに、徳川家達伝編纂主任・鳥取師範学校教授・新潟第二師範学校教授・新潟大学助教授・東京都立大学教授・早稲田大学客員教授・立正大学教授を歴任され、長年にわたり多くのすぐれた歴史学徒を世におくられている。また、一方では、『江戸幕府の権力構造』（昭和三九年九月）、『日本史概説』Ⅱ・Ⅲ（昭和四三年五月）を始めとする数多くの著書・論文によって計り知れない学問的影響をあたえられたことはあまりにも有名である。

本書は、生前の北島先生が、みずから、お選びになった研究論文一八本を、本学史学科教授村上直先生が中心となり編集されたものである。以下、この論文集の構成は、課題別の五つのタイトルが付され、つぎのようにまとめられている。

第一章 近世初期の領国経営

新刊紹介

S 39・5

徳川家康の信濃経営
徳川政権の蔵入地体制

第二章 近世農村の基礎構造

越後山間地帯に於ける純粹封建制の構造

隷農制の近世的形態

土地制度と農村構造

第三章 近世民衆の諸動向

江戸時代農民の「家」

後進地における農民的手工業の性格

九兵衛地蔵由来記

第四章 近世都市の成立と展開

江戸幕府の都市計画

江戸の都市構成と都市問題

近世都市の社会問題

第五章 近世後期の政治と民衆

宝暦・天明期の政治と民衆

化政期の政治と民衆

水野忠邦の藩政改革

江戸幕府の仏教統制

「三方領知替」と上知令

天保改革論

幕末に於ける徳川幕府の産業統制

また、巻末には、「初出一覧」「解説」「年譜」「著作目録」「人名索引」が掲載されている。とくに「解説」では、総論部分

と第一章を村上直先生が、以下、第二章では、西脇康氏、第三章では青木直己氏、第四章では加藤貴氏、第五章では白川部達夫氏が丁寧な解説を添えられており、北島先生の論文の位置を研究史のなかで理解する上でも、我々に多くの便をあたえている。

紙幅の都合上、各テーマの内容を示す目次は割愛せざるをえないが、その下に付した発表年月に示されるように、論文の作成された時期は、昭和二五年一月から五四年十一月までの長い期間に亘っている。

また、対象とする時期も戦国期から幕末にまでおよんでおり、これらを論点別にまとめると次のようになる。すなわち、第一章では純粹封建制の地域類型および成立と解体に対する見解、第二章では、大名徳川家康の領国支配に関する問題、第三章では、民衆史を観点とする「家」および一揆の義民に関する問題、第四章では、江戸を中心とする都市論、第五章では、田沼期から文化・文政期の幕府政治支配および天保改革論、といった内容となる。

個々の論文は、テーマが多様であるという点で、著者の総体的な歴史認識とどのような関わりをもつものなのか、ということを考えさせるが、このような意味では、別に書かれた著者の多くの著作・論文を併せて読んでいく必要がある。むしろ、ここでは、著者の多彩な問題関心と鋭い分析・総合によって得られる歴史像が遺憾なく披瀝されており、であるがゆえに、また、われわれも、これらの論文から多くの示唆を得ることのできる点で、本書のメリットとなっていることを強調しておきたい。晩年の北島先生は、ご自分の研究のみならず歴史学の研究の主眼が、社会・経

済史や文化史を十分に視野の内に含めた「高度な政治史」研究の実現にあることを、われわれに、口ぐせのようにおっしゃっておられたが、本書の個々の論文が、このような視点から撰択された点に、この論文集の価値を見出すことができるといえるのである。

この意味でも、著者の偉大な研究の業績から学び、この遺産を継承しつつ乗り越えるためにも、本書は、近世史の研究を志すわれわれが、是非、熟読すべき著書である。最後に、北島先生のご冥福を心からお祈りすると共に、本書の刊行に尽力された村上直先生を中心とする人々に敬意を表し、あわせて、大学時代の学思になにも報いることのできないまま、お別れしなければならなかった悲しみを乗り越え、なおいつその研究の充実を誓って筆をおくことにする。

（一九八四年六月刊、六八〇〇円、A5判、五〇〇頁、名著出版）
（澤登寛聡）

長尾政憲著『横山大観と近親の人々』

横山大観といえは、近代日本の画壇を代表する巨匠であり、明治の先覚岡倉天心の愛弟子として東洋芸術の開拓に情熱をささげたことでよく知られている。大観は「一切の芸術は無窮を越^あふの姿に他ならず、芸術は感情を主とす、世界最高の情趣を顕現するにあり」という言葉を座右の銘として、自からを律し、天心門下の中心人物として活躍し、その理想の担い手となって下村観山や

菱田春草らと奮闘したことも有名である。大観には、明治三〇年（一八九七）の二九歳のときの「無我」。大正三年には日本美術院を再興し、それ以後、「遊刃有余地」（遊刃^{ユウジン}余地有り）、「生々流転」「山四趣」「夜桜」「虫の音」「山に因む十題」などの傑作の他、多くの富士山を描いたことでも広く知られている。こうした横山大観については、現在、台東区の上野不忍池畔にある横山大観記念館を訪れることによって、その全貌をかなり理解することができるといえる。

本書は、本学大学院を修了し、同記念館の学芸部長として長い間、大観の資料調査に当たっていた著者が、従来の大観の伝記とは全く趣を異にして、一書にまとめたものである。つまり、大観の人間像を近親の人々や父祖とのかかわりによって浮彫りにしようとしたもので、きわめてユニークな内容であるといつてよい。次に目次を開いてみることにしよう。

序 ある日の対話から

I 祖父酒井喜熙の生涯と酒井家の人々

II 父酒井捨彦と地図製作事業

III 母は和歌に思いを託して

IV 大観のおじたちが残したものの

V 酒井家の地図学の系統

V 横山家と大観の家族

資料編

解題——大観研究をさらに深めたい人のために

横山大観——九〇年のあゆみ

新刊紹介

以上の内容については、「凡例」によると、まず序章とⅥ章から読みはじめるのがよいと記してある。書物は読む人によって理解の仕方はさまざまである。しかし、大観についてはじめて知ろうとする人にたいしては、こうした周到な配慮も必要ではないかと考える。序章では、記念館を訪れる常連の客との対話があり、平易な問答のなかで、大観とその芸術への理解を得られるようになっている。Ⅳは、弟が生まれたとき、母方との約束で横山家継ぐことになったが、その横山家の家族についての記録である。

ところで横山大観の生家酒井家については本書のⅠ・Ⅱによって明らかであるが、大観の祖父喜熙は水戸藩の勘定役（勘定奉行）を勤め、紀行文も著し、地図学者としても著名であった。さらに父捨彦も明治期に地図製作事業に携わり「万国地図」や「校用日本新図」などを発行している。ついでⅢ・Ⅳでは母の酒井寿恵や父の捨彦の七人兄弟姉妹の動静について明らかにし、とくに時習義塾や時習学舎の経営などについて触れている。Ⅴは祖父喜熙の作製した編集図の系統、また、伊能忠敬の図の活用などに触れ、資料編には、こうした横山大観の関係の基礎資料を二〇点が収録されている。なお「解題」は大観の研究を深めるために有益であり、「横山大観——九〇年のあゆみ」は、大観の生涯を知るための年譜としてもきわめて便利である。本文中で歴史的事件について、専門的な説明を必要とするものについては、「コラム」を設けて読者の理解を深めるように配慮されている。横山大観について貴重な基本資料が収録されている点からも、大観の研究や

その人間像を知ろうとする人々にとっては必読の書というべきである。

〔一九八四年九月刊、A5版、一八三頁、鉦鼓洞発行、非売品〕

（村上直）

丹治健蔵著『関東河川水運史の研究』

わが国の近世封建社会の特質を明らかにしていく場合、交通運輸の研究はきわめて重要な位置を占めている。しかしながら河川水運史の研究は、川船支配体制を中心に都市・農村の商品流通の諸問題に関する多くの研究課題を含みながらも、これまで最も遅れた分野の一つに数えられていた。こうした学界の状況のなかで、本書は江戸幕府の政治的・経済的基盤をなしていた関東および東北、上信越地域を中心に、江戸と物資流通に重要な役割を果たした利根川水運と商品流通の実態を明らかにし、また、幕藩領主が関東の河川水運や商品流通の発展にどのように対応したかを、近世初期から幕末・維新期に至るまで一貫して考察し、さらに明治期以降を展望した注目すべき研究書である。次に本書の構成をみることにしよう。

第一章 関東河川水運発達の沿革

第一節 近世以前の河川水運

第二節 河川航路の開発

第三節 河川水運発達の要因

第二章 上利根川水運の展開と商品流通

第一節 上州倉賀野河岸の成立と領主廻米の動向

第二節 上州平塚河岸の成立と商荷物の動向

第三章 中利根川水運の展開と商品流通

第一節 総州境河岸の成立と商荷物の動向

第二節 総州布施河岸の盛況と陸付荷物の動向

第三節 中利根川水運と奥州荷物の動向

第四章 総州境河岸の衰退と商品流通

第一節 鬼怒川板戸河岸と境河岸衰退の相关性

第二節 文政期における商荷物の動向

第三節 天保期における商荷物の動向

第四節 流通量の変化とその要因

第五節 むすび

第五章 奥川船積問屋の衰退と登り荷物

第一節 奥川船積問屋の機能と登り荷物

第二節 文化二年の木綿線綿直買・直積入りと奥川船積問屋

積問屋

第三節 文政九年の塩・糠直積出入りと奥川船積問屋

第四節 天保十二年の株仲間解散令と奥川船積問屋

第五節 むすび

第六章 上利根川水運の統制と前橋藩・川越藩

第一節 関東河川水運統制の概観

第二節 領主の河岸支配と運上金上納の実態

第三節 寛延・明和期における廻米仕法と運賃

第四節 新流通路の開設と領主廻米の動向

第五節 宝暦十二年の役船負担と問屋・船持出入り

第六節 むすび

第七章 関東における川船極印改め制の確立過程

第一節 初期川船奉行とその性格

第二節 明暦大火と川船極印改め制

第三節 延宝六年の川船極印改め制の確立

第四節 元禄期における川船支配機構の確立

第五節 むすび

第八章 関東における川船支配政策の展開

第一節 享保期における川船制度の改革と江戸町名主の抵抗

抗

第二節 宝暦・天明期における川船支配政策の展開

第三節 寛政期における川船支配政策の展開

第四節 むすび

第九章 幕末維新期関東における川船統制

第一節 幕末期における川船統制と年貢・役銀収奪の強化

第二節 維新政府の川船支配と船税制度の確立

第三節 むすび

第十章 明治以降における河川水運の衰退過程

第一節 川蒸気船の就航

第二節 見沼通船会社の設立

第三節 栃木県管下河川水運の盛況と衰退

第四節 埼玉県管下河川水運の衰退過程

第五節 むすび

新刊紹介

第十一章 信濃川沿岸における一豪商の存在形態

——越後与板町備前屋と西廻り海運——

第一節 延宝・元禄期における備前屋の台頭

第二節 宝永・享保期における大名貸の展開

第三節 享保期における経営規模の拡大

第四節 元文・延享期における大坂廻米と当銀屋

第五節 寛延・宝暦期における備前屋の衰退

第六節 むすび

付録 関東河川水運史関係史料

以上、本文一・二章四七節と付録から成っている。本書は全体として、近世前期において領主的、河川運輸機構の一環として成立した関東の河岸問屋が、近世中・後期にみられた農民的商品流通の進展にともない衰退していく過程を、幕藩領主の川船統制策などと関連させながら多角的、且つ体系的に究明したものである。

これらの内容は、著者丹治氏が長年にわたって取り組んできた利根川水運に関する膨大な地方文書を駆使した、手堅い実証的研究によって論旨が展開されている。そして、その中心をなしている利根川筋の河岸問屋の衰退の要因については、全体として元禄期以降の新河岸・新問屋の成立、領主の流通政策の改変による廻米量の減少、享保期を画期とする市場の発達による市場構造の変化、生産地の移動、流通路の変更などがあげられている。その他、近世中・後期に発達した農間商い、在郷商人の活動に関連する商品流通機構の変化、また、北関東の蔬菜類が江戸市場において圧迫されて生産の縮小、停止されたことや河川の自然条件など

につき、きわめて多角的な究明がなされている。また、それと同時に江戸から関東または、その以北の農村へ物資を送り込んでいゝる奥川船積問屋の衰退についても、江戸地廻り経済の進展にとまなう新興商人や在方商人、船持、船頭らの直積みによる取り扱い荷量の減少、天保十四年（一八四三）の株仲間解散による独占的運輸業者の低落に起因することなども指摘している。

さらに幕藩領主の河川水運の統制に関しては、川船奉行の川船極印改め制の実施のなかに軍事的性格から徴税吏的性格への変化を究明し、享保期の川船支配機構の改革と船年貢・役銀の徴収の強化の過程を幕府財政との関連によって明らかにしているのである。

そして宝暦から寛政期にかけては、農民的商品流通の進展を背景に広範に出現する農村の小船や所働船に対する統制の強化の実態を明らかにするとともに、諸藩の河川水運統制についても考察している。また、幕末・維新时期から明治以降については、とくに資本主義社会形成の展望のなかで、既存の河岸場や河岸問屋の衰退と課税対象の拡大化、さらに鉄道や貨物自動車の出現による衰勢、廃業への推移を明らかにしている。

以上のように、本書における利根川の水運を中心とした多角的な究明は、幅広い地方文書の分析とすぐれた考察力によって、はじめて解明されたものである。利根川筋の体系的な研究成果という点でも大きな特色を示しているといつてよい。

〔一九八四年二月刊、五、八〇〇円、A5版、四六七頁、法政大学出版局〕

（村上直）

河原先生著書出版記念会

昭和五十九年七月二〇日、午後六時より飯田橋会館で、河原正博先生の近著『漢民族華南発展史研究』（吉川弘文館）の出版を祝賀し、教え子・知友が集まって記念会を催した。参加者は史学科の元教授和田久徳先生ほか卒業生を含め四五名で、和氣に満ちた一夕を過ごした。

前号要目（法政史学 第三十六号）

- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 八世期の鎗帯に示される授位……………伊蔵 玄三 | ——東北末期古墳例を通して—— |
| 戦国大名の鍛冶師支配……………段木 一行 | ——武蔵国多摩郡刀工山本氏の場合—— |
| 小田原宿における助郷負担……………宇佐美ミサ子 | ——西助郷村の負担の実態—— |
| 日清戦争と居留清国人問題……………岩壁 義光 | 明治二七年「勅令第一三三七号」と横浜居留地—— |
| 『愛静館筆語』に見る幕末二儒の頼山陽観……………安蔵 英男 | △学界動向▽ |
| 第六回日ソ歴史学シンポジウムに参加して……………倉持 俊一 | 書評と新刊紹介 |